

ふと気がつく、部屋にある大きな鏡に、いつかどこかで出会ったはずの、ひとりの少女が映っています。

小花とチュールの飾りがついた帽子をかぶって、白いレースがフワフワと揺れるワンピースを上手に着こなした、夢を見る様な瞳の少女です。

ふり向くと、私の後には、レイナ、あなたが立っています。

十二年前の、初秋の風が心地良いある日の夕暮れに、生命を与えられ、私のもとへやって来た天使が、こんなに大人になって、私の目の前で微笑んでいるではありませんか？

本当に、レイナなの？ こんなにステキにママイの服を着こなしてくれて……

嬉しいに違いないのだけれど、なぜか、私は驚きでいっぱいになって、それ以上は言葉が出ないのです。

母親とは、そういうもの。いざという時に、寡黙になってしまう。

いつもはあんなに、無邪気にふたりして、おしゃべりしているというのに、母親であることを意識した時、急に言葉を失ってしまうのです。

特に、母親が自分の子供の頃のハナシを、娘にするのは、結構照れてしまうものです。

母親として、真面目に自分を語るなど、特別の時ぐらいしかないのですから。